

たすものとして位置づけられる。そこにはさらに、宇宙の絶対的何性 (quidditas absoluta) としての神と、その縮限された何性 (quidditas contracta) としての宇宙という規定が与えられる。

この点に関し、クザーヌスは次のような例を挙げて説明する。絶対的何性が神自身であるということから、太陽の絶対的何性は月の絶対的何性とは別のものではあり得ない。その一方で、太陽の縮限的何性は月の縮限的何性とは別である。というのも、事物の絶対的何性は事物それ自体ではないが、事物の縮限的何性は事物それ自体にはかならないからである。つまりクザーヌスにとって、宇宙はその縮限的何性を、完全にその絶対的な原因・根拠としての神に依拠しているのであり、またそれが同時に、具体的・対象的な事物の規定の本質を成しているのである。

以上のような論点から、神のみならず、事物の何性をも厳密には把握不可能とするクザーヌスの見解が、単に人間知性の能力の限界という認識論的側面のみに基づくものではないということが明らかにされる。むしろそこには、宇宙の縮限的何性を介し、事物・個物が絶対的何性を自らの原因・根拠とするという、いわば宇宙論的あるいは形而上学的根拠があると言えるであろう。

## 聖女／魔女考

——西洋中・近世の魔女言説から——

黒川 正 剛

西洋中・近世のキリスト教社会における女性イメージを「聖女」と「魔女」の二極分解・二項対立の関係性のもとで捉えることは人口に膾炙していると言えるだろう。本発表の目的は、その関係性の具体的内実を同時代の文献・画像史料を検討することによって明らかにすることにある。

中世末から近世にかけて猛威をふるった魔女狩りに大きな影響を与えたドミニコ会士の異端審問官ハインリヒ・クラームルが中心となって著した『魔女の槌』(一四八六年初版。本発表では一五八〇年出版のラテン語版を使用)は、女性嫌悪・女性誹謗の書として一般的に知られている。しかし同書では「称賛されるべき善い女」「聖女」についても論じられており、その記述内容と魔女についてのそれを比較することによって、聖女と魔女の二極分解の関係性の内実を知ることができる。『魔女の槌』はユデイト、デボラ、エステルなど聖書の中で国や民族を救う役割を果たした女性たち、また聖母マリアを始めとする聖女を称賛されるべき女性として挙げている。しかしその一方で「当代においては、経験が示すように」、「不誠実が男よりも女に多く現れている」と述べ、女性一般を魔女と結び付けている。このような記述内容から、次のような聖女と魔女の特徴と関係性を読み取ることができる。すなわち、称賛されるべき女

性、聖母マリア、(死後の列聖によって) 聖女となる女性は過去の存在・希少性・幻視体験や想念における出会い・想起を特徴とし、魔女は現在の存在・夥多性・現実の中での出会い(経験)を特徴とする。聖女は過去志向性のもとで把握される存在であるのに対して、魔女は現在志向性のもとで把握される存在である。このような聖女と魔女の特徴を、家父長制が進展し、女性の社会的地位が低下していった中世末から近世にかけての西洋社会の状況のもとで捉えなおすと、聖女はいわば想念の中に存在する女性の(偽りの表象)であったのに対して、魔女は日常生活の中で経験・目撃される(真なる表象)であったと言えるだろう。

『魔女の槌』という文献史料上の言説から明らかにする以上のような聖女と魔女の関係性は、同時代の図像史料によっても確認できる。図像は言説がイメージ化されたもの(表象)とも言える。ハンス・バルドゥング・グリーン(一四八四/八五一五四五年)はシュトラースブルクで活躍した画家であり、魔女、死と女、原罪、聖母マリアに関わる図像を数多く残したことで知られる。シュトラースブルクは『魔女の槌』中で言及され、一六世紀初めには大聖堂で魔女断罪の説教が行われるなど魔女と因縁浅からぬ土地であった。そのような土地で人生の大半を過ごしたバルドゥング・グリーンが魔女裁判研究史上、「最初の魔女のサバトの絵(版画)」と言われるものを作成したのは一五一〇年のことである。同時期にバルドゥング・グリーンは死と女、原罪、聖母マリアに関わる図像も制作している。この時期以降も生涯にわたってバルドゥング・グリーンは聖母

マリアと魔女に関わる図像を多く生み出したが、それらの図像の解読から聖母マリアは過去の存在として、またイエスの母として、いわば「理想主義的」に描写される一方、魔女はイヴおよび「死」に追われる女、また年齢を重ねるとともに老女と化していく女と重ね合わされることによって「現実的存在」として描写されていることが指摘できる。バルドゥング・グリーンが晩年に残した「魔法にかけられた馬丁」(一五四四年)では、魔女は農村の貧しい老女を思わせる姿で描かれており、その描写は極めて現実主義的である。

西洋中世末・近世における聖女と魔女の二極分解の関係性には、現在性と過去性といった時間性、および「現実」と「理想」といった概念が関係している。

いわゆる『魔女への鉄槌』における

「魔女」概念について

野村仁子

一四八七年に出版され、今日魔女裁判の元凶になった著書と評されている *Malleus Maleficarum* は、ドイツ語では *Der Hexenhammer*、英語では *The Hammer of Witches* と訳され、日本語では『魔女への鉄槌』と訳されている。しかしながら、Hexe (魔女) と訳されている *malefica* という言葉には、語源的に魔女という意味は含まれていない。それは字義通りにとらえれば、「悪事を行う者(女性)」という意味である。